伯牙絶弦　解答

A　語句の意味と読み

(1)　（琴を）ひく。演奏する。　／もとは「太鼓」の字。動詞で「楽器を鳴らす」。「鼓す」とサ変動詞で読む

(2)　（〜する）ちょうどその時に。〜するにあたって。　／「〜するに方たりて」で「ちょうど〜するときに」。教科書によっては「方（まさ）に琴を鼓して」と読み、「方に」＝ちょうど、とする（意味は同じ）。どちらの読みでも再読文字ではない

(3)　山が高くそびえ立っているさま。　／山の高さを表す語。「乎」はようすを表す語につき、「〜乎として」と読む

(4)　しばらく。少しの間。　／後漢の高誘の注に「少選は須臾（しゅゆ）の間なり」とある。現代仮名遣いでは「しょうせん」

(5)　しょうしょう／水が勢いよく（盛んに）流れるさま。　／★「とうとう」と読まない。水のようすを表すときの「湯」の音は「しやう」

(6)　一生（の間）。死ぬまで。　／「身を終ふるまで」の意

B　句法

(7)　詠嘆（〜だなあ）。ふつうの語順「琴を鼓すること善きかな」の主語と述語を入れかえ、「善きかな」を先に出して感動を強めている（倒置）。　／白文では「善哉乎鼓琴」。「哉」＝「かな」。「乎」は、ここでは読まない形で書き下している（「哉乎」の二字で「かな」と読む、と説明する本もある）

(8)　若／比況。「〜のようだ」。　／「如」も同じく「ごとし」と読む。書き下し文では助動詞なのでひらがなで書く

(9)　「不復〜」＝二度と〜しない（部分否定）。「復不〜」＝今度もまた〜しない（全部否定）。　／★読みはどちらも「また〜ず」。「不」が「復」の上にあると「もう一度」の部分を打ち消す。説明のしかたは教科書によって少しちがうので、お使いの教科書に合わせること

(10)　不二復鼓一レ琴（「鼓」に一レ点、「不」に二点）　／読む順は「復→琴→鼓→不」。「琴→鼓」はレ点、「鼓→不」は間に「復」をはさむので一・二点

(11)　「以て〜と為す」とも読む。意味は「〜と思う・〜と考える」。　／思った内容の終わりに「と」がつく。ここでは「…足る者無しと」まで

(12)　〜するだけの値打ちのある人はいない。　／「足る」＝〜するだけの値打ちがある・十分である。「無〜者」＝〜する者はいない

C　主語・指す内容

(13)　伯牙がひく琴（の音・演奏）。

(14)　伯牙　／★琴をひいている人の心。鍾子期は聴き手

(15)　伯牙　／直前の「琴を破り弦を絶ち」「復た琴を鼓せず」と同じ人物

(16)　自分が琴をひいて聞かせる相手のため。つまり、鍾子期のように伯牙の琴の心を聞き分けてくれる人のため。　／「為に琴を鼓する」＝（その人の）ために琴をひく。「為」は「なす」ではない

D　口語訳

(17)　（伯牙が）ちょうど琴をひいているとき、心は太山（泰山）にあった（心に太山を思い描いていた）。

(18)　すばらしいなあ、（あなたの）琴は。高くそびえていて、まるで太山（泰山）のようだ。

(19)　伯牙は琴をこわし、弦を断ち切って、一生二度と琴をひかなかった。

(20)　世の中にはもう、（その人の）ためにふたたび琴をひくだけの値打ちのある人はいない、と（伯牙は）思ったのである。

伯牙絶弦　解答／現代語訳

E　内容・記述

(21) 伯牙が琴をひきながら、心の中で太山（泰山）の高くそびえる姿を思い描き、その思いを琴の音に込めていたということ。

(22) 伯牙が琴をひきながら心に思い描いていたもの（太山・流水）を、音を聞いただけで言い当てたもの。二つ並べることで、偶然ではなく、伯牙の思いが変わってもそのたびに鍾子期が正しく聞き分けたことがわかる。

(23) 琴の心を聞き分けた鍾子期が死に、もう琴を聞かせる値打ちのある人は世にいないと思ったから。（四十四字） ／答えは⑫〜⑭の一文にある。「鍾子期の死」＋「聞かせる値打ちのある人がいない」の二つを入れる

(24) すぐれた人物（賢者）は、自分の値打ちを本当に理解し、礼をつくして迎えてくれる相手がいなければ、力を尽くそうとしないという考え。 ／伯牙＝すぐれた人、鍾子期＝その値打ちをわかってくれる相手、とあてはめる

F　文学史・故事

(25) 『呂氏春秋（りょししゅんじゅう）』／呂不韋（りょふい） ／戦国時代の末、秦の宰相だった呂不韋が、まわりに集めた学者たちに作らせた。よく似た話は『列子』湯問篇にもあるが、鍾子期の死と琴をこわす場面はない

(26) 知音（ちいん） ／もとは「音を知る」こと。例：彼は私にとってただ一人の知音だ

(27) 伯牙絶弦（はくがぜつげん）／心から理解し合った親友を失った深い悲しみのたとえ。親友の死を嘆くこと。 ／「伯牙絶絃」とも書く

【現代語訳（全文）】

伯牙が琴をひき、鍾子期がそれを聴いていた。（伯牙が）ちょうど琴をひきながら、心に太山（泰山）を思い描いていると、鍾子期は言った。「すばらしいなあ、あなたの琴は。高くそびえていて、まるで太山のようだ。」しばらくして、（伯牙が）心に流れる水を思い描くと、鍾子期はまた言った。「すばらしいなあ、あなたの琴は。水が勢いよく流れて、まるで流れる川のようだ。」

鍾子期が死ぬと、伯牙は琴をこわし、弦を断ち切って、一生二度と琴をひかなかった。世の中にはもう、（その人の）ためにふたたび琴をひくだけの値打ちのある人はいない、と思ったのである。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる